

2013年4月、5年ぶりに考古博物館に戻ることとなった。

開館準備の5年間、そして2004年4月の開館からの4年間。がむしゃらに走り続けた9年間を過ごした後、2008年からは館を離れ、本庁文化財課勤務となった。その間も史跡の管理や地中探査の担当として西都原との縁は途切れることはなかったものの、当然のことながら博物館の活動そのものに直接関わることは少なくなっていた。

積み重ねられる館としての実績と経験。スタッフの入れ替わりに伴い否応無く変化する雰囲気。そこに感じていたある種のもどかしさや羨望。心にからむ僅かな不安と悦び。複雑な想いと、数ヶ月前からの右足の痛みを抱えて西都原へと戻った。

2012年、現存する日本最古の歴史書『古事記』の編纂から1300年となり、日本各地で多くのイベントが開催され、関連する出版物も刊行された。日向神話の舞台である宮崎県においても例外ではなく、「神話のふるさと」のキャッチコピーの下、県をあげて官民一体となった様々な取り組みが行われた。

「神話といえば...」の梅原猛先生も来県され、時間や空間にとらわれない哲学としての神話について、満員のシーガイア国際会議場で講演された。

県内に伝承される数多くの神楽も、本来のホームグラウンドを離れ、ありとあらゆる場所や機会に披露され、多くの県民がいつもとは異なる雰囲気の中で鑑賞した。これほど神楽が舞われた年は、かつて無かったのではないか。

そして、それらを受け止める県民の意識や関心が確実に高まっていることは、各種の講演会やイベントに集う人の数からも明らかだった。

しかし、教育委員会、とりわけ埋蔵文化財保護部局としては、神話に浮かれているだけではいけない。

2012年は、大正元年（1912）から同6年まで行われた西都原古墳群の発掘調査から100年の節目でもあった。この発掘調査は、『記紀』に記された神話世界の史実性を実証しようと宮崎県が主催し、東京・京都の両帝大や帝室博物館、宮内省などから一流の学者を招聘して行われた。その目的が、時代的な色彩を帯びていたとは言え、我が国初の本格的な学術調査であったという事実は、学史に刻まれている。そして紛れもなく、宮崎県の埋蔵文化財行政の出発点でもあったのである。

加えて、2013年には東九州自動車道関連の発掘調査が終結し、2014年には西都原考古博物館が開館10周年を迎える。

このように、宮崎県の埋蔵文化財保護行政にとって重要な節目の年が連続するこの機会をとらえ、これまでの100年を顕彰し、これからの100年を展望することが必要であった。県文化財課、埋蔵文化財センター、西都原考古博物館が共同し、2012年からの3ヵ年事業として「交差する歴史と神話 みやざき発掘100年」に着手した。

人の心に刻まれた「神話」

郷土の大地に刻まれた「歴史」

二つの「記憶」が今、交差する

このキャッチコピーが示すように、「神話」と「歴史」の関係性を探ることこそが、教育委員会として、文化財保護部局としての神話との関わり方であると考えたのである。初年度の2012年11月には、文化財課が主導して、イベントとシンポジウムを開催した。事業の種まき期である。

2年目の2013年、埋蔵文化財センターが主導し、東九州自動車道関連調査をはじめとする県内各地の遺跡発掘調査の成果を紹介する展示会や講演会を計画している。事業の伸展期である。

そして、締めくくりである2014年は、開館10周年を迎える西都原考古博物館が主導し、西都原古墳群発掘100年記念の展示会やイベントを行う予定である。西都原の100年は、宮崎の埋蔵文化財の100年でもある。考古博も10年。事業の収穫期である。

そして次の時代へ。

個人的には今現在、二つのリハビリ中である。5年のブランクを埋め、今の考古博物館を把握するための、そして坐骨神経痛からくる右足の痛みへの...

(東 憲章)

